

第2章 伊勢原市の概要

1 自然的・地理的環境

(1) 位置・面積

本市は、神奈川県のはぼ中央、相模川の西側に位置し、距離にして東京から約 50 km、横浜から約 45 km、時間としては小田急小田原線で都心から約 1 時間の位置にあたります（図 3）。南側は平塚市、西側は秦野市、北側、東側は厚木市と隣接しています（図 5）。

市域は南北約 7.28 km、東西約 9.98 km に広がり、その面積は 55.56 km² となります。県西部に広がる山地には面積の広い市町村が多く、また、三つの政令市が広い面積を占めている神奈川県においては、全 34 市町村では上から 14 番目、17 市のうちでは 11 番目の大きさになります。



図3 市の位置

(2) 地形・地質

本市を大きく見ると、関東平野の南西部、周囲を取り巻く山地との境界に当たります。個別的には、市域の東寄りに相模川とその支流による広い沖積平野が広がり、西側は県西部の丹沢山地に属します。市の北西端にそびえる標高 1251.7 m の大山を頂点とし、沖積地が広がる南東部へと次第に標高を下げ、最も低い場所は標高 8.1 m ほどとなります。概ね北西から南東へ傾斜する地形となっています。そうしたことから、河川は大山から南、東方向へと流れ下っています。そのひとつ大山から流れる鈴川は、大山山内では大山川とも呼ばれ、「雨降山」の別名を持つ大山の水を集め、善波川、栗原川らの西部地域の川と合流し、平塚市へ至ります。この他、市域の東側でも、渋田川、歌川等がいずれも東へ向かった後南へと下り、平塚市との市境で合流します。市の東側、厚木市との境界は、現在埋め立てられていますが、かつては厚木市小野から玉川が流れていました。これらの河川はいずれも、最終的には平塚市内で金目川（花水川）に合流し、相模湾へと注ぎます。

こうした河川は、北西の山地から丘陵地、台地を縫って流れ下り、複雑、多様な地形を形成しています。丘陵、台地と谷戸が入り組む地帯では、地中

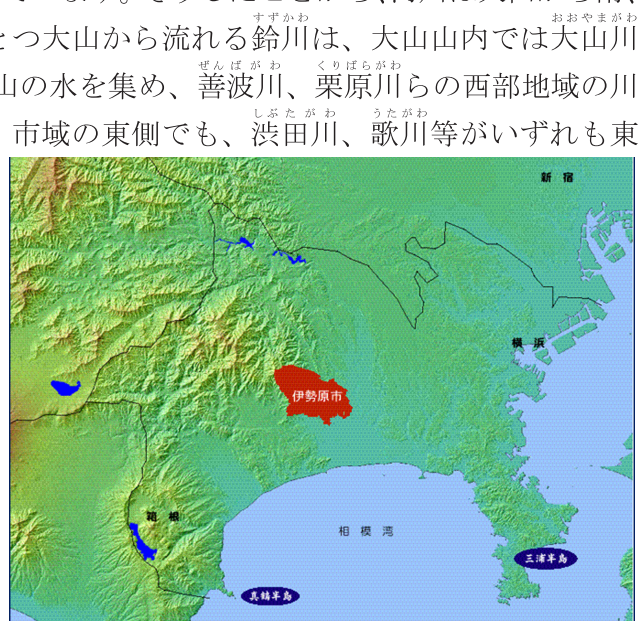
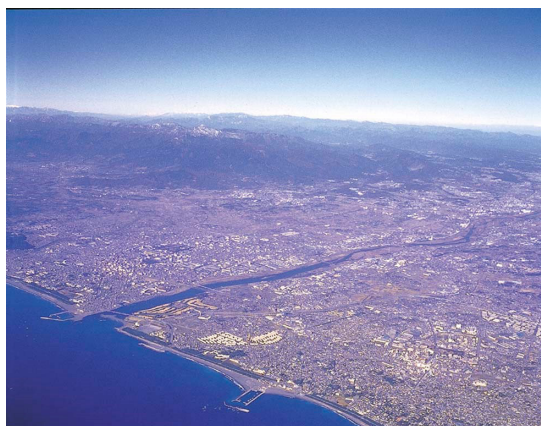


図4 神奈川の地形図



からの湧水が見られ、それらが集まって大地を潤しています。伊勢原台地や愛甲台地は標高 20 ～ 40 m ほどで、沖積低地へと張り出し、水も確保され、耕作や居住にも適した地形となっています。市域の南東寄りには、河川による沖積低地となり、古くから水田として利用されています。

市域の地質は、北西部の山地が丹沢層群^{たんざわそうぐん}と愛川層群^{あいかわそうぐん}からなり、最も古い丹沢層群は新第三期中新世の前期から中期（今から約 1,700 万年前）に、海底火山の活動による火山砕屑岩^{さいせつがん}の堆積で形成されたとされています。これがいわゆるグリーン・タフと呼ばれる緑色の凝灰岩^{ぎようかいがん}で、良質のものは石材として加工されました。弥生時代から古墳時代には管玉^{くだたま}



の石材となり、市内では玉つくりの工房跡が発見されています（坪ノ内・久門寺遺跡）。また、近隣の比々多神社には玉つくりの神が祀られています。江戸時代には七沢石、日向石として石碑や建築材、構築材に加工され、別名「相模青石」として利用されました。一方、山地の東側、南東側を取り巻く丘陵や台地は、大山山地から流れる河川の礫を主体とし、その上部を厚い関東ロームが覆っています。このローム層は主に箱根や

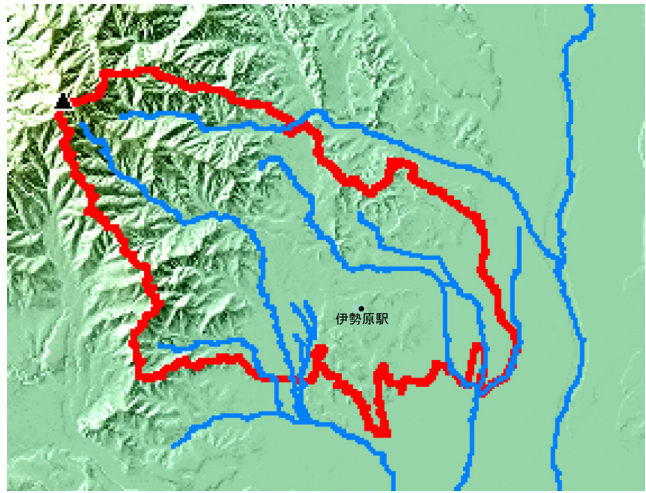


図7 伊勢原の地形図

富士の火山噴出物が堆積したもので、約1万5千年前までに形成されたと考えられます。市城南東側の沖積平野は、相模川等による自然堤防と後背湿地からなり、基盤となる埋没谷に厚さ30～40mの砂層、泥層が堆積しています。その時期は縄文海進最盛期の約6,500年前を中心とし、7,000年前から1,100年前まで継続的に堆積したと考えられます。

（3）気候

本市の気候は、東日本型の東海関東型に属し、令和元年の年間平均気温は16.5℃と比較的温暖です。北西に大山を有する地形から、県内他地域と比較して降雪が少なく、年間の降雨量は1,500mm前後です。適度な降雨と温暖な気候が、居住に適した土地として太古から多くの人々が暮らし、永い歴史が紡がれてきた大きな理由と考えられます。

特に水資源に関しては、関東一帯が水不足となる場合でも、丹沢では深刻な状況になることは少なく、降雨量と丹沢山地の保水力によるものと考えられます。

風向きは、秋から春にかけて北北東から、夏には南南西から吹くことが多く、風速は年平均約2.4mです。

近年では、猛暑やゲリラ豪雨等の異常気象による被害が各地で発生していますが、本市の平均気温も長期的には上昇傾向にあり、また、局地的大雨の発生もあり、自然災害や生態系への影響が懸念されています。

（4）生態系

本市の西側の丹沢山地には、針葉樹、広葉樹の豊富な樹林が広がっています。スギを中心とする針葉樹林は主に人工林で、江戸時代の記録には建築材等として利用されたことが記されています。一方、斜面の勾配が急な大山の山岳地帯には、モミの原生林が広がっており、県の天然記念物指定を受けています。モミは環境の恵まれた場所では他の針葉樹に負けてしまうため、他の針葉樹が育たない厳しい環境で生育するとされ、大山の原生林は全国的にも貴重な例とされています。

それよりも高度を下げた比較的緩やかな斜面には、広葉樹林が広がっています。ミズキやコナラ、ケヤキ等は木工品の材料として利用され、大山地区では数多くの木工品や挽き物等の職人が活動していました。そうした製品のひとつが大山詣りの土産物として

名物となった「大山こま」で、その製作技術は市の無形民俗文化財に指定されています。

また、大山阿夫利神社や宝城坊、更に比々多神社等は広大な社寺林で守られています。特に宝城坊の寺林は、針葉樹、広葉樹が混在した多様な樹叢が広がっており、県の天然記念物となっています。同じく樹齢 800 年、高さ 39 m の二本杉も県の指定を受けています。近年、こうした山間部の広葉樹林帯では、カシノナガキクイムシによるナラ枯れの被害が拡大しており、根本的な対策が求められています。

市街地でも、大福寺の大クスノキは樹齢 400 年とされ、県の天然記念物に指定されています。しかし、こうした住宅と近接している市街地の大木、社寺林については、落葉や台風対策等、管理が難しく、維持に苦慮している実態があります。

また、自然環境に恵まれた丹沢山地には、多くの野生動物も生息しています。国の特別天然記念物のカモシカをはじめ、ツキノワグマ、ニホンジカ、イノシシ、ニホンザル等が挙げられます。しかし、こうした野生生物も、近年では田畑や果樹を荒らしたり、市街地で確認されたりと、害獣となるケースも多く見られます。また、シカを介して広がるとされるヤマビルも、大きな問題となっています。

(5) 景観

本市は、変化に富んだ地形を背景にした多様性のある自然的景観が特徴です。大山を中心とした山の緑、緑多き丘陵、溪谷の流れ等が挙げられます。また、季節ごとに咲く花木が多いことも特徴のひとつであり、桜、芝桜、新緑、紫陽花、彼岸花、紅葉等の見頃には多くの人々が訪れます。大山については、相模湾から大島、江ノ島、房総半島までを見渡す大山山頂や、阿夫利神社下社からの眺望に加え、各地から大山を仰ぎ見る景観もあり、特に後者は、多くの市民にとって原風景となっています。

また、文化的な景観としては、大山の先導師旅館群が地域固有の景観となっています。大山詣りの中心的役割を果たした御師（明治以降は先導師）は、自身の住宅を講の宿泊施設（宿坊）としても提供しました。こうした御師の住宅が立ち並ぶまちなみは、江戸の情緒と大山詣りの風情を今に伝えています。現在でも、30 軒以上が営業しており、全国に残されている御師集落としても最大とされています。講から寄進された玉垣や、宿坊ならではの手水、灯籠、参詣記念碑等が、往時の雰囲気醸し出しています。

こうした景観を次代に継承していくために、伊勢原市景観計画及び伊勢原市景観条例に基づき、大山地区を「大山まちなみ継承地区（景観重点地区）」に指定しています（指定は 65 ページ、図 17 の大山地区の範囲）。



写真3 田園地帯から望む大山



写真4 大山の先導師旅館群

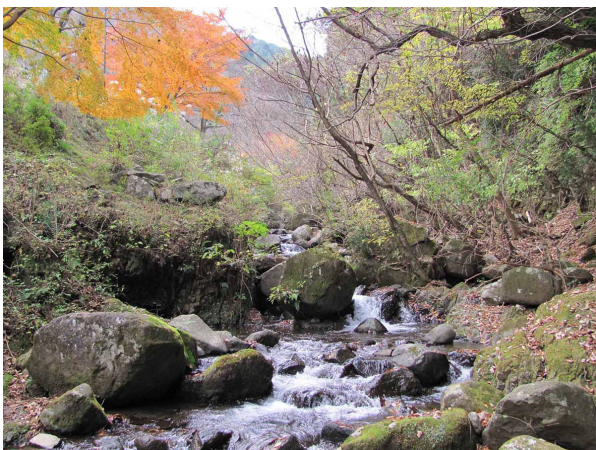


写真5 日向溪谷

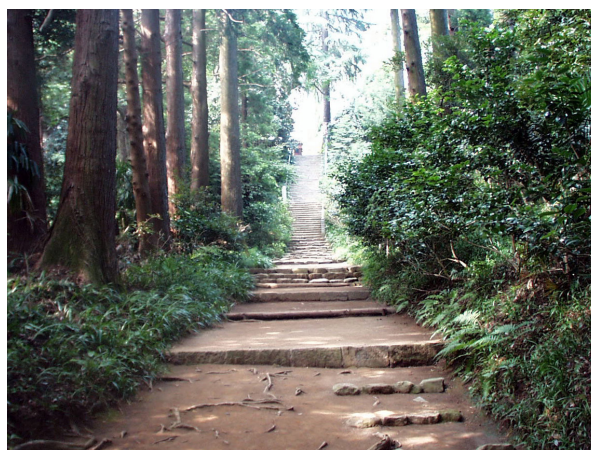


写真6 宝城坊の参道

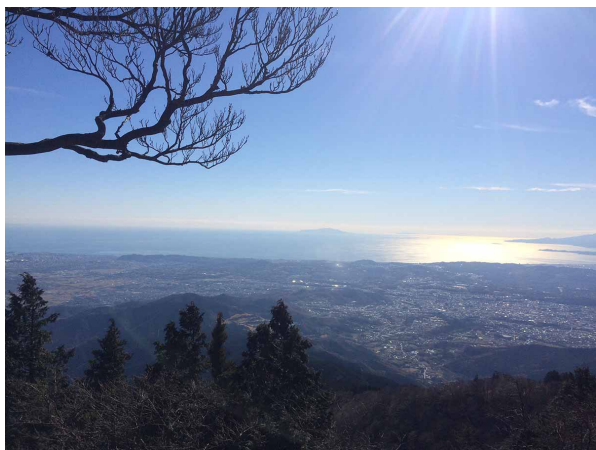


写真7 大山からの眺望



写真8 台地上に展開する住宅

2 社会的環境

(1) 伊勢原市の沿革

伊勢原という名は江戸時代の初期の元和 5 年（1619）または 6 年（1620）に成立した伊勢原村が始まりとされ、地名としては比較的新しいものです。その当時、現在の市域に当たる範囲は、その伊勢原村をはじめとし、大山寺の寺領であった坂本村（現在の大山地区）や三之宮村、上粕屋村、下糟屋村など、33 か村に相当します。後に本市の範囲となるこれらの村々は、江戸時代の初期は幕府の直轄領でしたが、後に旗本の支配となり、江戸時代を通じてそれぞれの村を 2～5 人ほどの旗本が分割して統治していました。

明治 11 年（1878）に郡区町村編制法が施行されると、戸籍法（明治 4 年（1871））により解体された村々が復活し、市域には 1 町 31 か村（唯一の町は大山町）が分立します。更に明治 22 年（1889）に市制・町村制が施行された際には、大山町、伊勢原町の 2 町と比々多村、高部屋村、成瀬村、大田村、岡崎村の 5 か村に統合されました。そして、昭和 29 年（1954）には、前年の町村合併促進法に基づき、岡崎村を除く 2 町 4 村が合併して伊勢原町となります。合併にあたっては、それぞれが対等の立場で合体合併し、町名については、該当町村内で唯一の商工都市であり、小田急線伊勢原駅として交通上の要地であることから、「伊勢原町」とすることとなりました。更に昭和 31 年（1956）には、岡崎村が二分し、それぞれ平塚市と伊勢原町に合併して、現在の市域となります。

そして昭和 46 年（1971）に、市制特例法に基づき市制を施行し、県下 15 番目の市として伊勢原市が誕生しました。

(2) 人口

江戸時代の人口については確かなデータがありませんが、文献により各村の戸数を知ることができます。それによると、天保 14 年（1843）の村の戸数は平均で 67 戸、100 戸を超える大きな村として大山村 311 戸、上粕屋村 135 戸、沼目村 123 戸（池端を含む）、子易村 116 戸、日向村 112 戸、伊勢原村 106 戸、小稲葉村 102 戸が挙げられます。とりわけ大山村は群を抜いて人が多い村で、大山詣りの盛況によるものと考えられます。

市制・町村制が施行された明治 22 年（1889）における現市域の人口は 17,000 人余りで、その当時最も人口が多かったのは比々多村で、続いて高部屋村、伊勢原町の順でした。大正 7 年（1918）の記録では、総数 19,000 人余り、大きな差はありませんが、順序は伊勢原町、高部屋村、比々多村の順となっていました。

2 町 4 村が合併して伊勢原町が発足した昭和 29 年（1954）当時の人口は 26,514 人でしたが、高度経済成長期の昭和 40 年代には好景気を持続する日本経済とともに発展し、首都圏近郊のベッドタウンとして人口が急増し、昭和 45 年（1970）から昭和 50 年（1975）までの 5 年間で約 17,800 人という急激な人口増加を記録しています。この間、昭和 46 年（1971）3 月の市制施行時の人口は 45,103 人、昭和 47 年（1972）には 5 万人を超え、昭和 50 年には 6 万人、55 年には 7 万人と着実に都市として成長を遂げてきました。

昭和から平成に入ってから、区画整理事業など都市基盤整備の推進により、人口は順調に伸び続け、昭和 62 年（1987）には 8 万人、平成 3 年には 9 万人を超え、平成 13 年には人口 10 万人を突破しました。昭和 29 年（1954）当時からみると、約 50 年で約 3.7

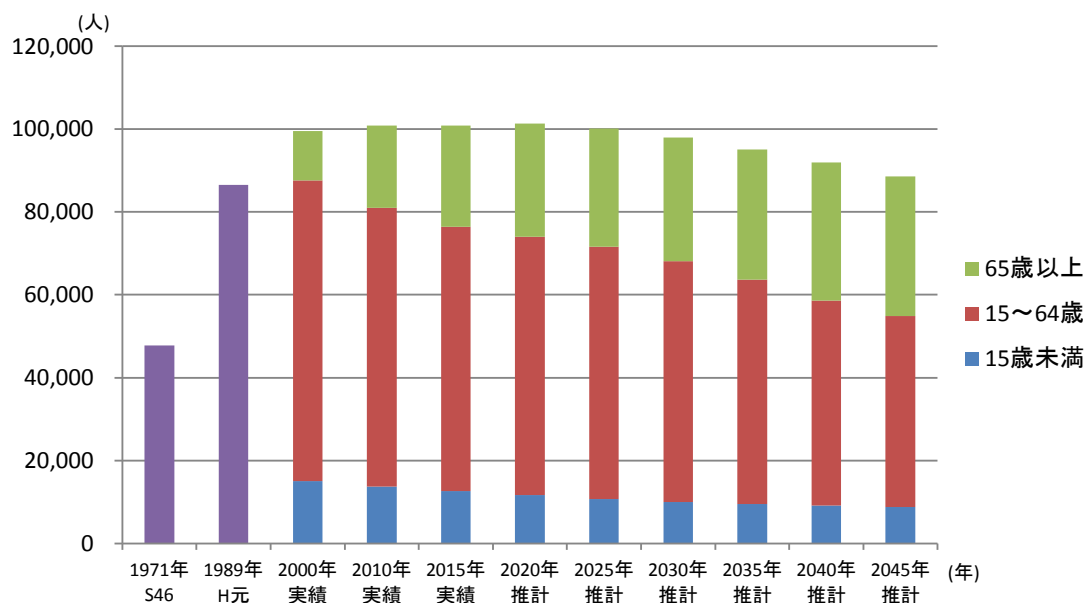


図8 伊勢原の年齢3区分別人口

出典：国勢調査（総務省）、将来推計人口（厚生労働省）
国立社会保障・人口問題研究所

倍の成長を遂げており、都市構造及び都市環境に大きな変化があったことがうかがえます。

平成30年10月1日現在102,470人となった本市の人口は、国立社会保障・人口問題研究所が平成30年3月に公表した推計によると、既に減少が始まっている想定でしたが、令和2年10月1日現在102,088人と未だほぼ横ばいの状況で推移しています。しかしながら、今後は緩やかに減少し、令和27年（2045）には9万人を下回るものと見込まれています。また、平成27年（2015）国勢調査の結果と令和27年（2045）の推計を比較すると、年少人口（0～14歳）は約31%減少、生産年齢人口（15～64歳）は約28%減少するとされ、一方で、老年人口（65歳以上）は約37%増加するものと予測されています。全国的な傾向と同様に、人口減少・少子高齢化は更に進展していくものとされています。

（3）産業

平成28年の集計によると、産業分類別の市内事業所数は、第3次産業が最も多く、全体の約82.6%を占め、次いで第2次産業が16.2%、第1次産業の1.2%となっています。また、事業所数と従業者数からみて、大部分が中小事業者であることがわかります。

歴史的に見ると、市域の基本的産業は伝統的に農業でした。江戸時代の大山詣りの隆盛により多くの参拝者が訪れたことに対しては、宿や土産物といった直接的な産業だけでなく、食料品、衣服、寝具等にわたる多くの業種が関わっていました。また、働き口としても大きな雇用を生んでいました。このように、大山詣りの経済効果は非常に大きく、一大産業となっていたと考えられます。

また、当時盛んであった手工業のうち、近年まで続いていた地域的なものとして、日向石を利用した石工、大山の木工（挽き物）が挙げられます。石材加工は、幕末以降、

石工集団として著名な高遠^{たかとお}（現在の長野県伊那市^{いな}）の石工から伝授された技術を用いて盛んになります。石の切り出しから加工、仕上げまでを行ない、昭和 22 年には 23 軒の石材業者が営業し、現在でも日向地区には石材店が集まっています。しかし、石の切り出しについては、昭和 30 年代前半から減少し、安価な輸入石材の普及もあり昭和 45 年（1970）を最後に行われなくなりました。

挽き物は、江戸時代の資料に、「名物の挽き物屋多し」と紹介されています。大山こまをはじめとする様々な土産物のほか、日常の道具等も製作し、戦後も二十数件を数えましたが、現在では大山こまの製作技術を伝えるのは 4 軒のみとなっています。

表 2 産業分類別事業者数と割合（平成 28 年 6 月 1 日現在）

産業分類	事業所		従業者	
	箇所数	構成比	人数	構成比
第 1 次産業（農林漁業）	43	1.2%	333	0.8%
第 2 次産業（建設・製造業）	583	16.2%	9,270	22.3%
第 3 次産業（サービス業ほか）	2,982	82.6%	31,980	76.9%
計	3,608	100.0%	41,583	100.0%

出典：経済センサス 活動調査をもとに作成

※公務は含まない

（４）観光

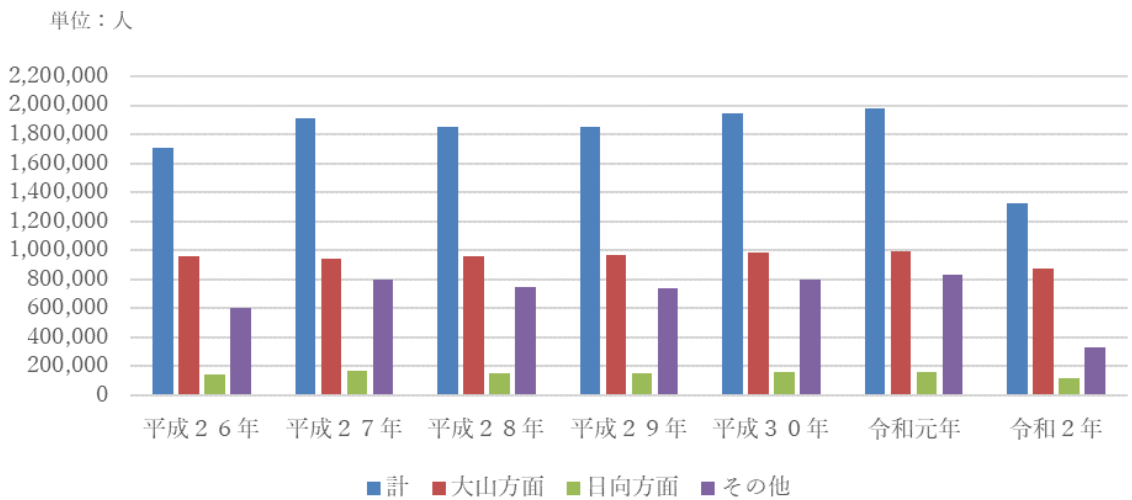
伊勢原を訪れる観光客の数は、平成 26 年の 170 万人から年々増加傾向にあり、令和元年には 200 万人に届くかという状況でしたが、令和 2 年は新型コロナウイルス感染症の影響を受け、130 万人に減少しました。

観光客数を地域別にみると、大山を訪れる人が半数以上を占めます。登山人気の高まりを背景に、近年実施している紅葉のライトアップや各種イベントに加え、地域資源として大山の歴史文化を活用する取組もその一因と考えられます。

平成 25 年 2 月に神奈川県の新たな観光の核づくり認定事業に“大山魅力再発見「平成大山講」プロジェクト～体感！悠久の歴史・安らぎの霊峰大山～」が認定され、歴史的観光地「大山」の魅力を再発見・再評価し、それらを発信することで、かつて「大山講」で賑わった江戸時代のように、活気ある観光地づくりが進められています。また、平成 28 年に「大山詣り」が日本遺産に認定されたことにより、国の財政支援を受けながら、大山の歴史を活かした観光振興に取り組むこととなりました。日本遺産の認定と伊勢原、大山の知名度アップのための P R 事業、大山の魅力を磨き上げ、更なる掘り起しをしていく事業、大山を訪れる観光客の環境整備事業を重点的に実施しました。こうした事業のうち、大山の宿坊を利用した修学旅行や合宿といった「教育旅行」の誘致、大山詣りにちなむ新たな名産品の開発については、特に力を入れています。

また、令和元年度からは日本遺産の構成文化財の整備についても支援制度が創設され、大山阿夫利神社、宝城坊、高部屋神社、比々多神社、石雲寺^{せきうんじ}等の構成文化財を訪れる観光客の環境整備にも取り組んでいます。この事業により、解説板、案内板の設置、安全柵や駐車場の整備等が実現しました。

この他、歴文構想を策定済みの市町村への国の補助金を利用して、歴史的な観光拠点の整備や P R 事業も実施しています。観光客が訪れる神社仏閣の公衆トイレの改修や地域の特徴を生かしたイベントの開催、歴史と文化財を紹介する映像制作等に取り組みしました。



	平成26年	平成27年	平成28年	平成29年	平成30年	令和元年	令和2年
計	1,708,974	1,914,101	1,858,092	1,857,922	1,949,752	1,985,427	1,330,730
大山方面	960,775	942,130	957,619	966,241	990,316	992,708	874,818
日向方面	142,897	173,580	153,383	151,371	159,874	160,553	121,276
その他	605,302	798,391	747,090	740,310	799,562	832,166	334,636

図9 伊勢原市の観光客数の推移 出典：商工観光課

同じく国が推進する日本博事業では、特に外国人観光客に向けた取組が重視され、大山阿夫利神社の「インバウンド^{たきぎのう}新能」や「宝城坊宝殿^{ほうでん}特別展覧会」等を開催しました。

このように、従来の観光施策に加え、近年では国、県の支援策を有効活用する中で、市域の豊かな自然とともに、歴史や文化財を本市特有の貴重な資産ととらえ、観光資源として活用することを推進しています。こうした事業については、教育委員会と観光部局、さらには市観光協会や地域の観光振興会、観光事業者等が連携して取り組んでいます。

(5) 交通機関

本市域が時代を問わず歴史の表舞台となり、多くの文化財が残されている理由のひとつとして、交通の要衝であったことが挙げられます。大山の麓という好適地であり、箱根から陸路で関東平野へ向かう東西ルートと相模川の右岸を相模湾から北関東へと向かう南北ルートの結節点であること、中世には鎌倉、小田原という政治、経済の中心と近接していたことが当地の重要性を物語っています。特に、市域を東西に走る矢倉沢往還^{やぐらさわおうかん}は、東京・赤坂から本市を通り、足柄峠を越えて静岡・沼津へと至る、現在の国道246号に引き継がれている道路であり、東海道が整備される以前からの重要なルートでした。江戸時代には、幕府により整備された東海道とともに、矢倉沢往還をはじめとする大山詣りの道を多くの旅人が利用しました。大山道は、大山を中心に江戸、八王子、平塚、小田原方面へ放射状に張り巡らされ、現在の主要な道路となっています（62ページ、図15参照）。明治時代に敷設された鉄道は、東海道線の平塚駅が明治20年（1887）に創業し、東京から大山への主なルートも平塚駅とそこからバスを利用するルートへと変わりました。昭和2年には東京の新宿と小田原を結ぶ小田原急行電鉄が開通し、伊勢原駅が開業しました。大山参拝の玄関口も伊勢原駅となります。大山詣りの参詣者を運ぶケーブル

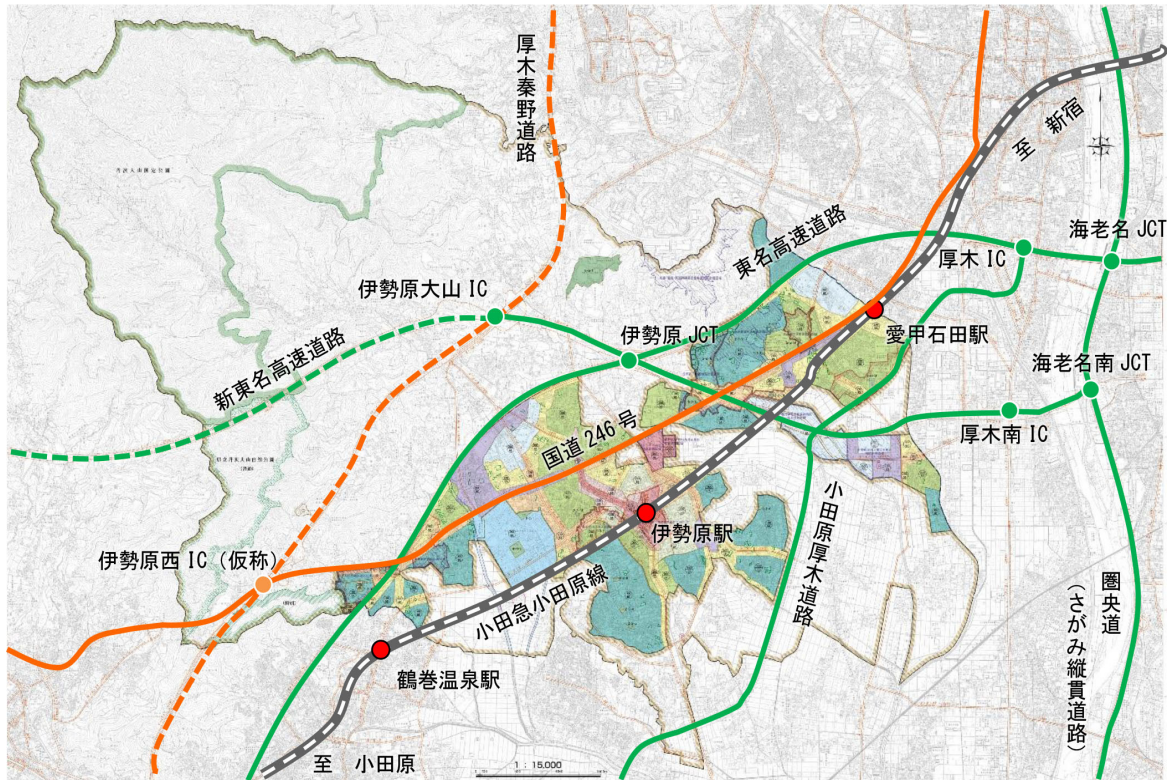


図 10 伊勢原市の交通網

出典：都市政策課

カー（大山鋼索鉄道）は昭和 6 年に開設し、戦争のため昭和 19 年（1944）に一時廃業となりますが、戦後の昭和 40 年（1965）に復活し、今に至っています。現在、小田急小田原線は、新宿まで約 60 分、海老名乗換えで横浜までは約 50 分で行くことができ、特急ロマンスカーも停車するようになっています。幹線道路は、先の国道 246 号に加え、東名高速道路、小田原厚木道路が市域を横断しています。

そして、令和 2 年に市域の北側に新東名高速道路の伊勢原大山インターチェンジが開設しました。これにより、伊勢原から東京方面へのアクセスが向上し、更に厚木から圏央道経由で北関東、東北方面への利便性も高まりました。また、伊勢原大山インターチェンジを中心に国道 246 号（伊勢原市善波）と国道 129 号（厚木市依知）を結ぶバイパス道路（厚木秦野道路）も整備が進められています。このように、新たな幹線道路の整備により、伊勢原の交通アクセスは飛躍的に向上することとなります。

（6）土地利用

市域の面積 55.56 ㎢のうち 21.2%が市街化区域、78.8%が市街化調整区域となっています（令和 2 年）。利用区分別でみると、農地 20%、丹沢大山国立公園を含む森林が 37%、河川水路が 2%、道路が 8%、宅地等が 19%、その他 14%（平成 30 年）となっています。農地・森林が約 6 割を占めていますが、農地の割合は減少傾向にあります。

本市では、昭和 45 年（1970）から都市計画法による線引き制度が施行され、昭和 46 年（1971）の市制施行前後から工業団地の造成や大規模住宅団地の開発が続き、自然的土地利用から都市的土地利用に転換が進みました。大山の山頂から麓にいたる緑の景観はほとんど昔のままですが、伊勢原駅や愛甲石田駅を中心とした市街地、成瀬地区や比々

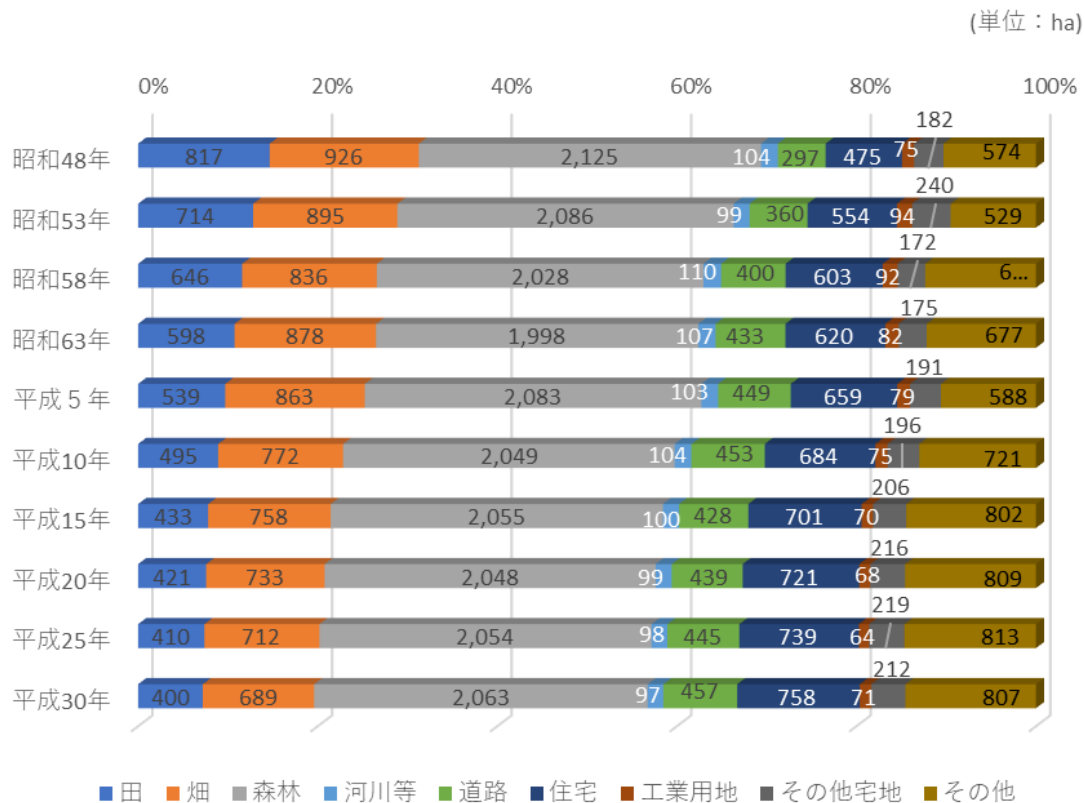


図 11 伊勢原市の土地利用の状況

出典：神奈川県土地統計資料

多地区などの里山は大きな変化を遂げてきたといえます。市内では現在、新東名高速道路、厚木秦野道路（国道 246 号バイパス）といった広域幹線道路の建設が進められており、新東名高速道路の伊勢原大山インターチェンジは一部供用が開始されました。

建設に際しては、事業エリア内における建設主体による埋蔵文化財の発掘調査が実施され、今までにない新たな歴史が明らかになりつつあります。加えて埋蔵文化財の保護に関する理解を深めるため、進行中の発掘調査現場の公開などが行われています。

（7）シティプロモーション

本市では、元気で活力ある都市として発展し続けるためには、地域の特性を生かした魅力あるまちづくりを進め、それを効果的に発信していくことが重要であるとの認識から、「いせはら」が市の内外から“選ばれるまち”になることを目指し、平成 27 年度に「いせはらシティプロモーション推進計画」をまとめました。その中では、「いせはら」の評価として、「歴史・文化」の満足度が高いことを踏まえ、訪れる人に対して「歴史と観光を同時に楽しめるまち」として発信していくという方向性のもと、基本戦略のひとつとして「歴史と観光で呼び込む」を掲げ、歴史・観光資源を最大限活用し、観光誘客を進めることとしました。また、推進計画期間終了の令和 2 年度には、これまでの基礎固めを踏まえ、更なる地域のブランド化を図り、今後も多くの人から“選ばれるまち”になるため、新たな方針となる「いせはらシティプロモーション指針」を策定しました。この中でも「いせはら」の都市イメージの発信に際して、引き続き「歴史と観光を同時に楽しめるまち」としての魅力を高め、総合的、効果的な推進を図ることとしています。

特に平成 28 年度に認定を受けた日本遺産については、その活用により観光等の地域振興へとつなげるためにも、日本遺産そのものの認知度を高め、「日本遺産のまち」としての本市の知名度向上を図る取組を進めています。

また、「いせはら」の知名度向上とイメージアップを図るため、シティプロモーションの顔として、本市公式イメージキャラクターである「クルリン」も活躍しています。

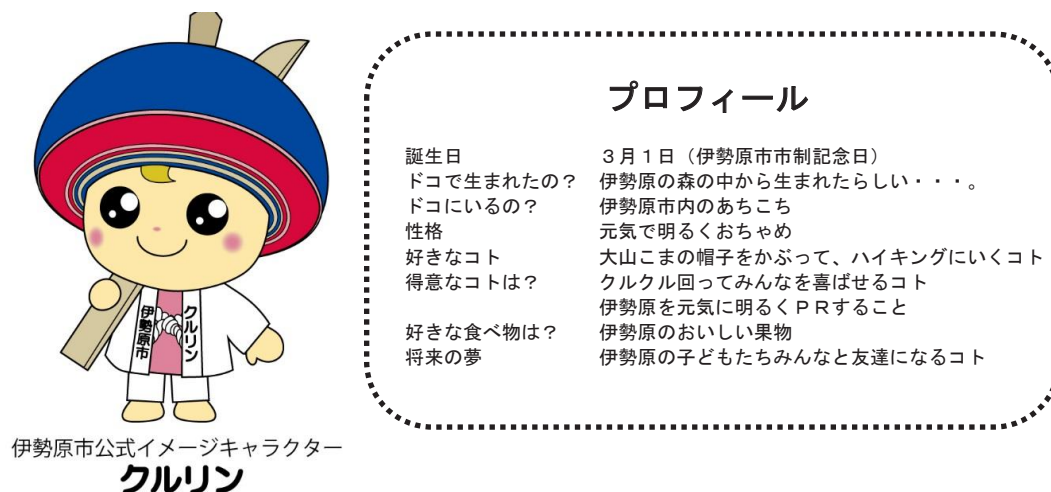


図 12 伊勢原市公式イメージキャラクター「クルリン」

（８）歴史文化に対する市民の意識

本市では、総合計画に掲げる施策等に対する市民の満足度、今後の重要度等を把握するために市民意識調査を行っています。総合計画に掲げる施策等について、無作為に抽出した市内在住の 18 歳以上の市民に対してアンケートを行うものです。

平成 27 年度には、3,000 人の市民を対象に、37 本の施策に対する現状の「満足度」と今後の「重要度」を調査しました。その結果、「歴史・文化遺産の継承」という施策の満

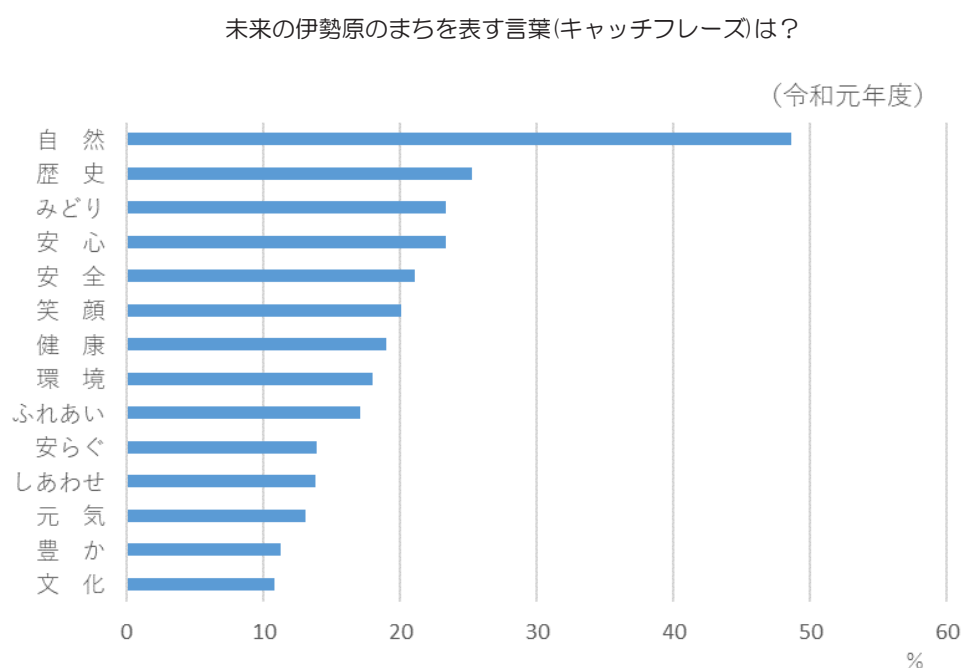


図 13 市民意識調査のアンケート結果

足度は全 37 本の施策の中で上から 3 番目ですが、重要度は下から 6 番目という評価でした。また、同様に、令和元年度の調査では、「歴史・文化遺産の活用と継承」という施策の満足度は、全 40 施策中 2 番目、一方、重要度は下から 2 番目となっています。満足度と重要度との相関分析では、現状維持領域に属するとされています。

また、令和元年度の調査において、あらかじめ用意した選択肢から回答する形で、「伊勢原市は今後、どのようなまちを目指したらよいと思いますか」との問いに対して、「歴史を大切にし、文化活動の盛んな文化の香り高いまち」を選んだ割合は 16.2%で、その他を含む 11 の選択肢中 8 番目という結果でした。一方、同じ形式で「未来の伊勢原のまちを表す言葉（キャッチフレーズ）」として、どのような言葉がふさわしいと思いますか」という問いに対しては、「歴史」を選んだ割合が 25.3%で、「自然」に次いで 2 番目でした。

こうしたことから、市民の意識としては、本市の歴史文化を市の特性として認識し、肯定的に考えているものの、「重要度」の評価が低いことは、それを活かしていくことによる効果やメリットの実感が伴っていないと考えられます。

（９）市の木・花・鳥

本市にふさわしい美しい緑の環境をつくり、市民の日常生活にゆとりと豊かさを与えるとともに、広く親しまれる市民のシンボルとしていくため、市民により、昭和 47 年 3 月 1 日に市の木、市の花、市の鳥が選定されました。

ア 市の木 しい

常緑広葉樹の高木で本州以南の暖地に自生しています。本市にも多く自生し、日向薬師大祭の「神木立て」にも使用されるなど、本市に縁の深い木です。

イ 市の花 ききょう

日本各地の山野の日当たりの良い草地に自生し、秋の七草の一つにも数えられています。太田道灌公の家紋にも使用されることから、本市には特に縁の深い花です。

ウ 市の鳥 やまどり

きじとともにわが国の特産種で、本州・四国・九州の山間地に生息しています。市内の山間にも生息し、俳句や和歌等にもうたわれています。



写真 9 市の木 しい



写真 10 市の花 ききょう



写真 11 市の鳥 やまどり

3 歴史的背景

(1) 伊勢原略史

ア 旧石器時代

新東名高速道路の建設工事に伴う栗窪地内での調査では、約3万年前の地層から石器が出土し、これが今のところ市内最古の遺物となっています。この時期の地球は、現在とくらべて平均気温が6～7度も低かったといわれ、本州地域では寒さに強いナウマンゾウやオオツノジカなどの大型動物を追って生活していました。そのための道具として、槍先に装着する石器や獲物を解体する石器が作られました。沼目・坂戸遺跡でも細石刃さいせきじんというカミソリのような小さな石の刃が発見されています。

この時代の資料が八幡台遺跡はちまんだい（東大竹）や咳止橋遺跡せきどめばし（上粕屋しもやと）、下谷戸遺跡（三ノ宮）などで発見されています。

イ 縄文時代

約1万2千年前から始まり、1万年間続くこの長い時期が縄文時代で、人々の生活も環境の変化に順応して大きく変わりました。そのひとつが土器の発明です。比々多神社境内の宮ノ前遺跡で発見された土器は、日本はもとより世界でも最も古い部類に属する土器です。また、同じ遺跡からは弓矢の先につけた石の矢じりゆうぜつせんとうき（有舌尖頭器）がたくさん出土していますが、この弓矢の発明も動きの速い中小の動物を捕るための工夫です。この矢じりを作っていた遺跡が、数百メートル離れた三ノ宮・下谷戸遺跡で見つかります。

市内では、白金山遺跡しらがおやま（高森）で約8千年前頃のものとする住居跡が見つかります。4、5千年前頃になると、比々多地区、伊勢原地区、岡崎地区にたくさんの住居が造られました。4千から4千5百年前頃には、東大竹の八幡台や日向の下北原に大集落が作られています。大山の山頂からもこの頃の縄文土器が出土し、大山への信仰の現れと考えられています。また、西富岡では縄文時代後期の谷が見つかり、木製品や植物の実等の貴重な遺物が出土しています。

ウ 弥生時代

弥生時代の開始年代については、近年の分析により紀元前1000年（今から約3千年前）にまでさかのぼるという学説が発表されています。市内で見つかった弥生時代の最も古い遺物は子易の大坪遺跡こやすで出土した土器で、弥生時代前期末、紀元前450年頃のもので、その後、中期後半になると、本格的に稲作が浸透したと考えられ、愛甲石田駅南の細谷遺跡ほそやや高森の宮ノ越遺跡くしはし、串橋の宮ノ根遺跡で、敵の侵

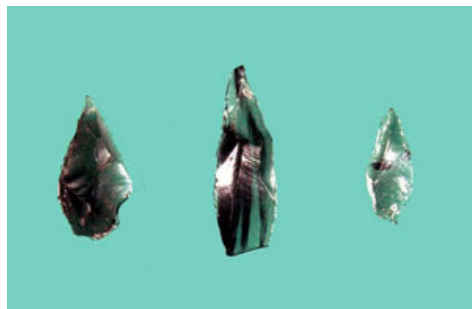


写真 12 ナイフ型石器



写真 13 市内最古の縄文土器



写真 14 弥生時代の環濠
（石田・細谷遺跡）

入を防ぐため村の周りを深い溝で囲った環壕集落^{かんごう}が見つかっています。また、後期には相模川流域に東海地方からの移住が想定されており、現在の愛知県東部～静岡県西部をルーツとする土器が石田や高森で出土しています。

エ 古墳時代

古墳には様々な形がありますが、市内では方墳、前方後円墳、円墳が見つかっています。方墳は4世紀中頃の築造と考えられる塚越古墳（高森）、前方後円墳は愛甲石田駅の南側に厚木市とまたがって位置する石田車塚古墳^{いしだくるまづか}（別名、愛甲大塚古墳）が挙げられます。

6世紀後半から7世紀後半にかけては、市内に古墳が激増し、石室を有する数百基の円墳が造られました。それらは、三ノ宮から上粕屋、日向にかけての山裾に集中し、近年では子易でも確認されています。中でも、三ノ宮の登尾山古墳^{とのおのやま}、埴免古墳^{はちめん}からは、金銅製の馬具や金銀の装飾をもつ大刀、銅鏡など、当時のステータスシンボルともいえる副葬品が出土しています。その豪華な内容は県内でも他に例がなく、この地域が当時の最高権力者を葬る重要な場として選ばれていたことがわかります。また、7世紀には、崖に横穴を掘って死者を葬る横穴墓も数多く造られるようになり、大山の麓は祖先を祀る神聖な地域であったようです。

オ 奈良時代

平城京に都が築かれた和銅3（710）年から奈良時代が始まります。市内にある日向山^{ひなたさん}霊山寺（現在の宝城坊）は霊亀2年（716）、石雲寺は養老2年（718）、大山寺は天平勝宝7年（755）に開かれたとされています。登尾山古墳には法具である銅鉤が副葬されており、仏教の片鱗は6世紀末にはこの地に及んでいました。そして奈良時代になり、他に先駆けて寺院としての形が整えられたと考えられます。この時代の集落は、東大竹の市場遺跡^{いちば}、沼目の天王原遺跡^{ぬまめ てんのうばら}、串橋の後原遺跡^{くしはし うしろはら}、板戸の宮ノ前遺跡など、市内の各地で見つかっています。

カ 平安時代

延暦13年(794)、桓武天皇は京都に都を移し、平安時代が始まりました。出土品を除くと、市内に残された最古の文化財として、平安時代の彫刻を挙げるができます。宝城坊の本尊である鉦彫りの薬師三尊像、十二神将立像、大山寺の木造不動明王坐像、安養寺（小稲葉）の十一面観音像、宗源寺（子易）の阿弥陀如来坐像などです。また、10世紀前半に編さんされたとされる延喜式神名帳^{えんぎしきじんみょうちよう}には、相模の十三の神社のうち、高部屋神社、比々多神社、阿夫利神社^{あふり}の名が記されており、仏教も神道もこの時代までに、宗教組織



写真 15 石田車塚古墳



写真 16 登尾山古墳の装飾大刀



写真 17 石雲寺

としての形が整えられていたと考えられます。靈山寺には歌人の相模が参籠したとの記録がありますし、比々多神社に伝わる「うずらみか」と呼ばれる須恵器の甕、木造のこま犬も平安時代の作と考えられています。

市内の平安時代の遺跡からは、奈良時代と同様に竪穴住居と掘立柱の建物の跡が並んで発見されます。東大竹の市場遺跡では十数棟に及ぶ倉庫群の跡とともに、倉庫の鍵、貞観 12 年（870）に鑄造された銅銭「貞観永宝」、墨で文字が書かれた土器などが出土し、田中の酒林遺跡では鉄製の道具を製作した鍛冶工房が見つかっています。

平安時代の終わり頃、伊勢原の大部分は京都伏見の安楽寿院が立券した糟屋荘と呼ばれる荘園で、京から派遣されて居を構えていたのが糟屋一族です。その棟梁である糟屋有季は、源頼朝に仕え、鎌倉幕府の成立にも重要な働きをします。

キ 鎌倉時代

源氏の棟梁である源頼朝は征夷大將軍に任命され、建久 3 年（1192）、鎌倉を本拠とする幕府を開きます。市内岡崎の無量寺周辺から平塚市域にかけては、岡崎城と呼ばれる居館があったといわれています。城主、岡崎四郎義実（よしざね）は三浦半島に本拠を置く三浦氏の一門で、義実は源頼朝より 30 歳以上も年上でしたが、石橋山の戦いには息子の真田与一（まなだよりち）とともに参戦し、その後も頼朝につき従って鎌倉幕府成立の功臣となりました。同じ三浦氏の一族で、当時石田を本拠にしていたのが石田次郎為久（ためひさ）です。為久は源範頼、義経らの木曾義仲追討軍に加わり、北陸へ落ち延びようとした義仲を討ち取った当事者です。石田地区にある円光院（えんこういん）北側の台地が石田氏の館跡といわれています。

鎌倉幕府の創始者となった源頼朝は、元暦元年（1184）に大山寺に田畑を寄進し、妻の政子が実朝（さねとも）を出産する際には、相模国中の神社仏閣に神馬（しんめ）を奉納しています。その中に大山寺、日向山靈山寺、三宮冠大明神（現在の比々多神社）の名があります。建久 5 年（1194）には娘の病氣平癒を願って靈山寺に参



写真 18 比々多神社のうずらみか



写真 19 掘立柱建物群



写真 20 宝城坊の木造寶頭盧尊者坐像（鎌倉時代）



写真 21 宝城坊の四天王立像（鎌倉時代）と十二神将立像（鎌倉～南北朝時代）

拝し、その後も使者を遣わして自らの歯の病が治るよう祈願しています。その妻政子も頼朝の死後、二度にわたって霊山寺に参拝しています。この頃、霊山寺には、薬師如来坐像、阿弥陀如来坐像、四天王立像など大きな仏像や賓頭盧尊者坐像が納められますが、これらも鎌倉幕府との関係が想定されています。また、浄業寺（三ノ宮）も政子が建立したといわれています。

鎌倉幕府の支配が將軍家源氏から執権である北条氏に引き継がれてまもなく、大山寺には鉄造の不動明王が納められます。

ク 室町時代

元弘3年（1333）、足利尊氏（この時点では高氏ですが、尊氏と統一）の離反をきっかけとして鎌倉幕府は滅亡し、後醍醐天皇による政治が開始されました。しかしその復古調の政治に対し多くの武士らが反発しました。源氏の棟梁としての尊氏の周囲にはそうした武士が集まり、やがて新たな武家政権を樹立します。京に幕府を開き、鎌倉には鎌倉府を置き、子の足利基氏に東国の支配にあたらせました。これが鎌倉公方で、補佐する管領には康安2年（1362）からは上杉氏になり、代々受け継ぐ形になりました。上杉氏は山内・犬懸・詫間・扇谷などの家に分かれていましたが、管領職は山内上杉氏が独占するようになります。扇谷上杉氏は、顕定が丹波（京都府）から相模鎌倉の扇谷に移り、居館を構えたのが始まりです。顕定の父、上杉宮内大輔藤成は観応2年（1351）には、「糟屋庄政所職」にあったといわれ、ここに以後の扇谷上杉氏と糟屋のつながりが推定できます。

ケ 戦国時代

鎌倉に置かれていた鎌倉府（鎌倉公方）と京の室町幕府が次第に対立するようになると、それは関東管領上杉氏と鎌倉公方との対立に発展します。上杉氏は鎌倉公方を追い、古河（茨城県）に逃れた公方（古河公方）と関東を二分する戦乱となっていく（享徳の乱）。この頃、扇谷上杉氏は、伊勢原の糟屋を本拠とする太田道真・道灌親子が家宰（家老職）として活躍していました。道灌は山内上杉家の内部反乱（長尾景春の乱）を平定するため、関東各地を転戦して勝利を重ね、扇谷家が勢力を伸ばしていきます。上杉氏と古河公方の対立は収まりますが、そうすると山内家と扇谷家の関係が難しくなり、そうした中、文明18年（1486）、太田道灌は主君である扇谷上杉定正により相模糟屋（本市）で殺されてしまいます。翌、長享元年（1487）下野で両上杉は戦端を開き、長享の乱が始まります。



写真 22 足利基氏が錦幡をかけたとされる宝城坊の二本杉



写真 23 太田道灌画像



写真 24 道灌の居城ともされる丸山城址

一方、伊豆から小田原に進出していた伊勢宗瑞（後の北条早雲）が、東方への勢力拡大を目指すと、両上杉家は和解しそれに備えますが、宗瑞の力を止めることはできませんでした。市内の岡崎城を本拠としていた三浦氏も宗瑞に攻められ、新井城（三浦市）で滅亡します。こうして相模国をはじめ関東の大半が宗瑞を継いだ北条氏に制圧されます。北条氏は小田原城を本拠地とし、伊勢原には宗瑞の四男である北条幻庵の所領があり、日向の石雲寺には、幻庵の印判状が残されています。

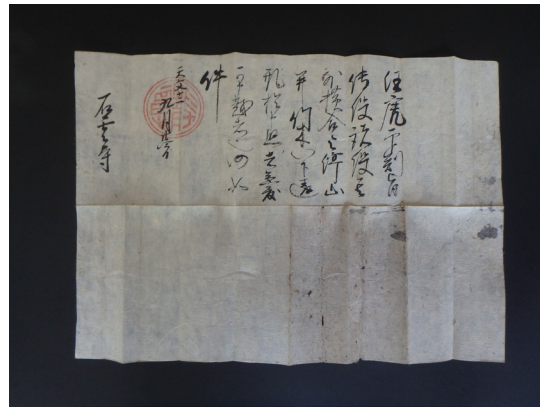


写真 25 石雲寺の印判状

天正元年（1573）、15代将軍足利義昭は織田信長によって京都から追放され、室町幕府は240年に及ぶ歴史に幕を閉じました。しかし、信長も10年足らずで滅ぼされ、天下統一の夢は豊臣秀吉に引き継がれます。

豊臣秀吉は天正15年（1587）に九州を平定し、諸大名に服従を誓わせますが、関東最大の北条氏だけがそれに従いませんでした。秀吉は北条氏討伐の命を下し、天正18年（1590）には自ら軍を率いて小田原城を包囲しました。このとき秀吉は、日向山霊山寺と大山寺に制札（軍勢が乱暴をはたらかないよう付近の住民の安全を保証）を授けたといわれています。北条氏当主氏直は3ヶ月に及ぶ籠城を続けましたが、小田原評定の後ついに投降し北条氏は滅亡しました。この小田原討伐の功績により、北条氏の所領が徳川家康に与えられます。

コ 江戸時代

慶長8年（1603）、徳川家康は征夷大将軍となり、江戸幕府を開きました。家康は江戸幕府を開くと、戦国時代以降、僧兵等の武力を有し、北条氏とともに戦った大山寺の改革に乗り出します。大山寺から武力を一掃して人事を刷新し、一方で寺領100石を寄進しています。3代将軍家光もまた、大山寺の再興に莫大な資金を投じ、将軍の代参として乳母である春日局らがたびたび大山寺を訪れました。

「伊勢原」の名は、江戸時代の元和5年（1619）、または6年（1620）に、伊勢山田の曾右衛門と鎌倉の湯浅清左衛門が千手ヶ原を拓き、伊勢神宮を勧請して鎮守としたことに始まったと伝えられています。

江戸中期以降には、庶民の間で大山詣りが大流行しました。集団で石尊大権現に参詣するもので、物見遊山をかねた小旅行は町人文化が芽吹き始めた頃の江戸庶民にもてはやされました。伊勢原は参拝者を受け入れる門前町として発展し、宿屋や商店などが軒を連ねるようになっていきました。

江戸時代の終わり、日本列島に諸外国の船が出没するよう



写真 26 大山道の道標



写真 27 浮世絵 納め太刀をもつ坂東三津五郎

になる頃、幕府の命により市内から北海道の官寺へ住職が派遣されました。厚岸の国泰寺^{あつけし こくたいじ}5世として下糟屋^{じんぐう}にあった神宮寺^{じんぐうじ}の文道玄宗和尚^{ぶんどうげんそう}、その執事として田中耕雲寺^{こううんじ}の松堂玄林和尚^{しょうどうげんりん}、そして第6世として池端蔵福寺^{ちくふくじ}の香国弁洲和尚^{こうべんえん}が派遣されています。そして、彼らが残した蝦夷地^{えぞち}での記録である『日鑑記』^{にっかんき}は、当時のアイヌやロシア人が登場する貴重な資料として国指定の文化財となっています。

サ 明治期

江戸の幕藩体制が崩壊し、200年余りにわたる太平の眠りから覚めた日本は、近代国家の成立に向けて、大きな変革を体験しなければなりませんでした。

明治初年(1868)に打ち出された神仏分離政策により、各地で廃仏毀釈^{はいぶつきしやく}が行われ、寺院、仏像に大きな被害がありました。特に大山では、徳川幕府との関係が深く、また、寺院の力が強かったこともあり、その反動として仏教排除の動きが激しく、大山寺は移転となり、関連する多くの文物が流失したとされています。また、地租改正により土地が課税対象となり、その売買が自由化されると、富裕層による土地の独占が進み、そのことが新たな産業を生み、結果として地域の経済成長につながっていきます。上粕屋の山口家では当主の山口左七郎^{さしちろう}が自由民権結社「湘南社」の社長に就任し、当家を会場に伊勢原講学会が開かれ、歴史、政治、経済、法律、社会等幅広い分野の学習、討論が行われました。そうした自由民権運動に関わった人たちの中には、金融や鉄道といった地域経済の発展へつながる取組にかかわる人も現れました。

明治22年(1889)には市制・町村制が施行され、この地域には伊勢原町・大山町・高部屋村・比々多村・成瀬村・大田村・岡崎村が生まれました。日本美術院を創設した岡倉天心の監督のもとで宝城坊の薬師三尊像が明治34年(1901)に修理されています。また、前年には東京人類学会会長の坪井正五郎が三ノ宮地区^{みくび}を踏査し、野首や下谷戸にあった古墳群を発掘調査しています。

シ 大正期

大正12年(1923)9月1日に起こった関東大震災は、多くの被害をもたらしました。日本国内の死者・行方不明者は、10万5千人余りと報告され、「神奈川県震災誌」によると、伊勢原の被害は死者128人、住宅の全半壊2,509戸にのぼったと記されています。大山では、山頂にあった阿夫利神社の本社が倒壊するなど、地震による甚大な被害に加え、その後の大雨で山津波(土石流)が発生し、宿坊を含め多くの建物が流されました。しかしながら関東大震災後の復興はめざましく、昭和2年(1927)には小田原急行鉄道(現・小田急電鉄)が開通して首都東京と結ばれました。更に昭和6年(1931)には大山ケーブルカーが開通しました。

ス 昭和期

昭和29年(1954)に伊勢原町・大山町・高部屋村・比々多村・成瀬村・大田村の6町村が合併し、新しい伊勢原町が誕生しました。当時の人口は2万6千人余り、やっと食糧事情が好転し始めた頃でした。昭和31年(1956)には岡崎村が分村して伊勢原町と平



写真 28 再建された大山寺本堂

塚市に合併しました。昭和 30 年代に国道 246 号や東名高速道路の整備、工場の誘致や八幡台団地の建設など、都市としてのまちづくりが進められます。昭和 40 年代に入り、伊勢原駅南口の開設や周辺の土地区画整理事業、伊勢原内陸工業団地の建設、伊勢原駅北口の中央通りの拡幅、あかね台、つきみ野といった大規模な新興住宅地の造成など、伊勢原は急速に近代的な街へと成長していきました。この結果、戦前から市域の主要産業であった農業の割合が大きく下がり、代わって製造業、サービス業が伸び、特にサービス業が主要な産業となっていくます。

昭和 46 年（1971）3 月 1 日、県下 15 番目の市として市制を施行し、伊勢原市が誕生しました。その後も好景気を持続する日本経済とともに首都圏近郊のベッドタウンとして発展しました。人口は昭和 47 年（1972）には 5 万人を超え、昭和 50 年には 6 万人、55 年には 7 万人、昭和 62 年には 8 万人と着実に増加し、そのために小学校の分離新設、幹線道路の整備、下水道の敷設等のインフラ整備に追われることになります。

セ 平成期

平成に入ってから区画整理事業など都市基盤整備の推進により、人口は順調に伸び続け、平成 13 年には人口 10 万人を突破しました。核家族化が進み、大量販売、大量消費の傾向により、市民の生活様式も大きく変化しました。それにより、地域で伝えられてきた神社の祭や風習、茅葺きや鍛冶等の伝統的な技術も失われていくこととなりました。

バブル経済後は長期の経済不況となり、自治体も行財政改革の推進に取り組むこととなります。一方で長寿社会により、急速に高齢化が進み、市民における 65 歳以上の割合は、平成 12 年では 12.0%、平成 22 年には 19.6%、平成 27 年には 23.5%、令和 2 年には 26.3%となっています。更に、今後は人口減少社会が到来すると予想されています。

歴史文化に関しては、開発と保存の調整が課題となってきましたが、バブル経済の崩壊以後、モノの幸せより心の幸せを求める風潮が広がったこともあり、地域の資産を活かした個性ある地域づくりが求められるなかで、地域の歴史文化が再認識されています。また、そうした地域資産を地域の活性化へ結びつける一環として、平成 28 年に「大山詣り」が日本遺産に認定されました。こうしたことを追い風に、歴史文化の活用を保存につなげながら、活気にあふれた魅力ある「しあわせ創造都市 伊勢原」を目指しています。



写真 29 大山ケーブルカーの案内



写真 30 八幡台の造成（昭和 30 年代）



写真 31 日本遺産のポスター

(2) 地名、伝承、昔話

地名は、地形や気候、利用形態など、その土地の特性に根ざした由来をもつものが多いなかで、過去の歴史的な出来事に関係すると考えられるものも見受けられます。言い換えや当て字、歴史的な根拠に乏しく、作り話に近いとされるものもありますが、地域の人々の生活に受け入れられ、定着してきたという事実は重要です。ここでは、歴史的な背景を有する主な地名について例示します。

古代に使用された地名としては、「日田」（比々多）、「櫛椅」（串橋）、「渭辺」（沼目）、「高部屋」等があります。中世では、「糟屋」、「岡崎」、「石田」、「善波」等の地名を名にした武将が活躍しています。江戸時代には、現在に通じる村名がほぼ使われていたと考えられます。伊勢

原という地名も、江戸時代の初めに、鎌倉の住人湯浅清左衛門と伊勢山田の山田曾右衛門が、大山詣りの途中に水音を聞き、開墾できると判断して中原（平塚市）の代官に荒れ地であった土地の開発を願い出で許可され、伊勢から神社を勧請した（現、伊勢原大神宮）ことによるとされています。

昔話にも、その当時の生活や文化がよく表れていますが、その中で歴史上の人物に関するものとして、霊山寺（現、宝城坊）を開いた行基^{ぎょうき}、大山寺を開創した良弁僧正^{ろうべん}、木曾義仲を討った石田次郎為久^{ためひさ}、霊山寺に参詣した源頼朝と北条政子、市域で暗殺された太田道灌、隠棲した連歌師心敬等^{れん が しん けい}にまつわる話が伝わっています。

また、文化財を題材としているものとしては、日向薬師宝城坊の大太鼓、二本杉、石雲寺の五層塔（大友皇子の墓^{おおともの みこ}）、善波太郎の墓とされる石塔群（中世串橋石塔群）等を挙げることができます。



写真 32 いせはらの古老の語り
（表紙）

(3) 災害史

災害に備えるためには、過去の災害に関する記録を追うことも大切になります。古い事例としては、平安時代の延喜元年（901）に編さんされた『日本三代実録』には、約1,150年前の貞観^{じょうがん}11年（869）に東日本大震災と類似した大地震が発生したことが記録されています。また、富士山の噴火（864年）、関東地方の大地震（878年）についても記述されています。相模地方ではこの地震で、海老名の相模国分寺の七重塔が倒れ、大山寺にも大きな被害があったとされています。

記録に残る市内の災害としては、江戸時代の元禄16年（1703）の地震で大山寺の諸堂が破損したこと、続いて宝永4年（1707）に富士山が噴火し、噴出した大量の砂が田畑や水路を埋め、大きな被害があったことが挙げられます。そして、大正12年（1923）9月1日に起こった関東大震災では、死者128人、負傷者129人、家屋の全壊1,615戸、半壊894戸、破損488戸という被害となり、大山山頂の阿夫利神社本殿、下糟屋の高部屋神社の本殿も倒壊しました。更にその後、大山では大規模な山津波（土石流）が発生し、広範囲にわたり先導師旅館等140戸が押し流されました。また、昭和13年には日向も山

津波に襲われ、浄発願寺奥ノ院が泥に埋まりました。明治時代から洪水に悩まされていた小稲葉や下谷では、震災の後に上流の山林が荒れ、大雨の

たびに土が流れて、しばしば川が氾濫しました。登録文化財となっている大山の堰堤(砂防ダム)も、こうした土砂災害の防止を目的として昭和初期に築かれたものです。

大火としては、江戸末期の安政2年に大山で発生した安政の大火があります。出火後、5日間にわたり燃え続け、本堂をはじめ19の堂が焼失しました。この教訓から、大山では今でも、どんど焼きを河原や中州で行っていると言います。



写真 33 大山の山津波の状況



写真 34 発掘調査で見つかった地震の地割れ